ISSN 2187-0772

エジプト学研究第 24 号　2018 年

The Journal of Egyptian Studies Vol.24, 2018

目次

〈 調査報告 〉

2017 年　太陽の船プロジェクト　活動報告 …… 黒河内宏昌・吉村作治 …… 3

第 10 次ルクソール西岸アル＝コーカ地区調査概報
…… 近藤二郎・吉村作治・菊地敬夫・柏木裕之・河合　望・高橋寿光・福田莉紗・米山由夏 …… 11

第 26 次アブ・シール南丘陵遺跡調査概報
…… 吉村作治・河合　望・近藤二郎・苅谷浩子・高橋寿光・米山由夏・石崎野々花・菅沼奏美 …… 36

第 3 次北サッカラ遺跡調査概報：踏査・測量・探査報告
…… 河合　望・三井　猛・吉村作治・近藤二郎・柏木裕之・高橋寿光
・梅田由子・米山由夏・石崎野々花・菅沼奏美 …… 48

第 3 次北サッカラ遺跡調査概報：試掘調査
…… 河合　望・吉村作治・近藤二郎・柏木裕之・高橋寿光・米山由夏・石崎野々花・菅沼奏美 …… 82

エジプト　ダハシュール北遺跡調査報告―第 24 次調査―
…… 吉村作治・矢澤　健・近藤二郎・柏木裕之・山崎世理愛・石崎野々花・有村元春 …… 113

Intact Middle Kingdom Anthropoid Coffin of Sobekhat from Dahshur North:
Discovery, Conservation and X-Ray Analysis
……Sakuji YOSHIMURA, Masahiro BABA, Ken YAZAWA, Richard JAESCHKE and Masayuki UDA …… 158

〈 研究ノート 〉

エジプト出土のミケーネ土器再考 …… 有村元春 …… 178

エジプト中王国・新王国時代におけるペクトラルの副葬にみられる変化：
ダハシュール北遺跡出土資料を用いた考察 …… 山崎世理愛 …… 203

〈 資料紹介 〉

メロエの衰退をめぐる研究の現状と課題 …… 坂本　翼 …… 229

〈 動向 〉

スーダン考古学文献解題―我が国の学問的歩みを理解するために― …… 坂本　翼 …… 242

The Journal of Egyptian Studies Vol.24, 2018

CONTENTS

Field Reports

Report of the Activity in 2017, Project of the Solar Boat
……Hiromasa KUROKOCHI and Sakuji YOSHIMURA …… 3

Preliminary Report on the Tenth Season of the Work at al-Khokha Area in the Theban Necropolis by the Waseda University Egyptian Expedition
……Jiro KONDO, Sakuji YOSHIMURA, Takao KIKUCHI, Hiroyuki KASHIWAGI, Nozomu KAWAI, Kazumitsu TAKAHASHI, Risa FUKUDA and Yuka YONEYAMA …… 11

Preliminary Report on the Twenty-Sixth Season of the Work at Northwest Saqqara by the Waseda Egyptian Expeditions
……Sakuji YOSHIMURA, Nozomu KAWAI, Jiro KONDO, Hiroyuki KASHIWAGI, Hiroko KARIYA, Kazumitsu TAKAHASHI, Yuka YONEYAMA, Nonoka ISHIZAKI and Kanami SUGANUMA …… 36

Preliminary Report on the Third Season of Arcaeological Survey at North Saqqara: Archaeological Reconnaissance, Mapping and Geophysical Survey
……Nozomu KAWAI, Takeshi MITSUI, Sakuji YOSHIMURA, Jiro KONDO, Hiroyuki KASHIWAGI, Kazumitsu TAKAHASHI, Yuko UMEDA, Yuka YONEYAMA, Nonoka ISHIZAKI and Kanami SUGANUMA …… 48

Preliminary Report on the Third Season of Arcaeological Survey at North Saqqara: Archaeological Work
……Nozomu KAWAI, Sakuji YOSHIMURA, Jiro KONDO, Hiroyuki KASHIWAGI, Kazumitsu TAKAHASHI, Yuka YONEYAMA, Nonoka ISHIZAKI and Kanami SUGANUMA …… 82

Preliminary Report on the Excavations at Dahshur North: Twenty-Fourth season
……Sakuji YOSHIMURA, Ken YAZAWA, Jiro KONDO, Hiroyuki KASHIWAGI, Seria YAMAZAKI, Nonoka ISHIZAKI and Motoharu ARIMURA …… 113

Intact Middle Kingdom Anthropoid Coffin of Sobekhat from Dahshur North: Discovery, Conservation and X-Ray Analysis
……Sakuji YOSHIMURA, Masahiro BABA, Ken YAZAWA, Richard JAESCHKE and Masayuki UDA…… 158

Articles

Mycenaean pottery found in Egypt: Revisited ……Motoharu ARIMURA …… 178

Changes in the Use of Pectorals between the Middle Kingdom and the New Kingdom
……Seria YAMAZAKI …… 203

資料紹介

メロエの衰退をめぐる研究の現状と課題

坂本　翼*

1. はじめに

スーダンの首都ハルツームから北東へ約 200km、かつてこの場所にメロエ（Meroe）と呼ばれる町があった（図 1）。ベデウィあるいはメデウィという古代名で呼ばれたこの町は、早くとも紀元前 1 千年紀初頭には存在していたようであり、前 6 世紀に王宮としての地位を確立すると、前 3 世紀以降は王墓地としてもその名を轟かせるようになってゆく。このことは、メロエに造営された無数の神殿やピラミッドが物語るところとなっている。かの有名なヘロドトスがメロエに言及しているあたり、如何にこの町が有名であったかが推察されよう。J. ガルスタング（Garstang）及び P.L. シニー（Shinnie）によって 20 世紀初頭から半ばにかけて発掘されたこの町は、L. チュルク（Török）によってのちに再検討・再出版され、基礎資料が出揃った（Garstang 1911; Shinnie and Bradley 1980; Török 1997; Shinnie and Anderson 2004）。

しかしながら、基礎資料が出揃っているにもかかわらず、メロエがどのように歴史上から姿を消したのかは依然良くわかっていない。後述する幾つかの史料に照らせば、メロエがアクスム王国の侵略に脅かされていたことは確かである。また、侵略の最たるものが紀元後 4 世紀中葉に生じていたことも論を俟たない。にもかかわらず、メロエの衰退をめぐっては激しい議論が繰り広げられており、この意見の不一致が研究上の大きな足かせとなっている。以上を踏まえる本稿は、メロエの衰退を理解するうえで欠かせない史料群に基礎的考察を加えることを目的としている。これは必ずしも新解釈を導くものではないが、研究の現状をここにまとめておくことは、今後の歩みを進める上で確かな布石となるであろう。以下、各史料の説明に続いてその歴史的意義を検討し、最後に、今後の研究が目指すべき一つの方向性の提示を以って簡単な結論とする。

2. 史料群

メロエの衰退を理解するうえで欠かせない史料群とは、三点の石碑である。二つはメロエで、もう一つはアクスムで出土している。本節ではまず各石碑を訳出し、これを元に、それぞれの歴史的意義を検討してゆくこととする。訳出にあたっては可能な限り最新の注解書に依拠しているが、意味が取りにくいところは関連書籍も随時参照した。なお、各石碑における実際の行数は、訳文中に上付き数字で示してある。

（1）石碑 1（図 2）

この石碑は、1909 年にメロエで発見されたものである。その出土状況は定かでないものの、スーダン国立博物館所蔵の遺物台帳によれば、現地住民が偶然掘り当てたものとされる。石碑には、少なくとも 14 行のギリシア文字が高さ 30cm、幅 29cm の範囲に刻まれており、書体の特徴から後 3 世紀末あるいは後 4 世紀前半に比定されている。石碑は所々欠損しているが、次のような内容が綴られている（Bernard et al. 1991-2000: No. 286; Eide et al. 1998: No. 285; Łajtar 2003: No. 77）。

＊　東独立行政法人国立文化財機構アジア太平洋無形文化遺産研究センター アソシエイトフェロー

図 1　本稿で扱う主な遺跡

[1] …… アクスム、ヒムヤル …… の王 …… [2] …… 完全無欠の神アレス（マフレム）…… 人々が言い争う時 …… [3] …… 私は …… から …… 運び …… [4] …… 略奪し …… [5] …… ここに辿り着いた …… [6] …… 高貴な女性 …… そして …… [7] …… 王とともに …… [8] …… 大部分を …… に …… [9] …… 兵士（？）とその子供達 …… [10] …… 私は直ちに …… へ向かい [11] …… 私は …… そなたへ [12] …… 貢物の対象 [13] …… 銅製像一つ [14] …… [21] ……

（2）石碑 2（図 3）

この石碑は、1975-1976 年にメロエで発見されたものである。シニーによれば、石碑は神殿 KC102 に放棄されていたもので、少なくとも 7 行のギリシア文字が高さ 26cm、幅 33cm の範囲に刻まれている（Shinnie and Anderson 2004: 106-108）。石碑は所々欠損しているが、後述するマフレム（Mahrem）神への言及を根拠として後 4 世紀前半に比定されている（Bernard et al. 1991-2000: No. 286A; Eide et al. 1998: No. 286; Łajtar 2003: No. 78）。

[1] …… のアレス（マフレム）…… [2] …… も …… [3] …… 少女も …… [4] 女も …… ない …… [5] …… 到着後、ここに王座を設け [6] …… 報いとして …… [7] アレスに（？）…… この王座を与える。

（3）石碑 3（図 4.1-2）

この石碑は、16 世紀初頭にアクスムで発見されたものとされる。E. リットマン（Littmann）が詳しく註解したこの石碑には、全 52 行のゲエズ文字（古典エチオピア文字）が高さ 144.5cm、幅 54cm の範囲に刻まれており、それによれば、この石碑はエザナ（Ezana）というアクスム王によって建立されたものである。エザナは後 4 世紀中葉にキリスト教を受容した王として有名だが（Finneran 2007: 181）、この石碑には、彼が行なった一つの軍事遠征の様子が綴られている（Littmann 1913: No. 11; Bernard et al. 1991-2000: No. 189; Burstein 1998: 97-100）。

①導入部

[1] この世のいかなるものより偉大な天主、その御力により、[2] 私、エラ＝アミダの息子、ハーレン族の子、アクスム、[3] ヒムヤル、ライダン、サバア、サルヘン、シヤモ、ベガ、[4] カスの王、諸王の王、エラ＝アミダの息子、エザナは完全無欠となる。[5] 私を王へ導いた偉大な天主、永遠なるもの、完全なるもの、[6] 完全無欠なるもの、その御力により、いかなるものも私の前にひれ伏す。

②展開部

[7] 全てを司るもの、その御力により、私はノバ討伐に乗り出した。[8] なぜなら彼らは、反抗的かつ不遜だからである。なぜなら彼らは、「お前らにタッカゼは超えられない」と挑発してきたからである。[9] なぜなら彼らは、マングルト族、ハサ族、バリア族、[10]「黒い人々」に暴力行為を働き、「赤い人々」にさえも攻撃をけしかけたからである。なぜなら彼らは、二度ならず三度も誓いを裏切り、周辺部族を [11] 殺戮したからである。なぜなら彼らは、その悪事を問うべく私が送った使者達を、[12] あろうことか尋問し、追い剥ぎし、[13] 槍を奪い取ったからである。彼らは、再三にわたる警告を無視するのみならず、悪事を働き続けたため、[14] 私はノバ討伐に乗り出した全土の主、その御力により、私は、[15] タッカゼにあるケマルケの浅瀬でノバと戦った。彼らは逃げ去ったため [16] すぐさま後を追い、23 日のあいだ、[17] 行く先々で彼らを虐殺し、捕虜を取り、[18] 戦利品を奪い続けた。加えて、[19] 煉瓦と藁でできた彼らの町を焼き払い、食糧、鉱石、鉄、銅を運

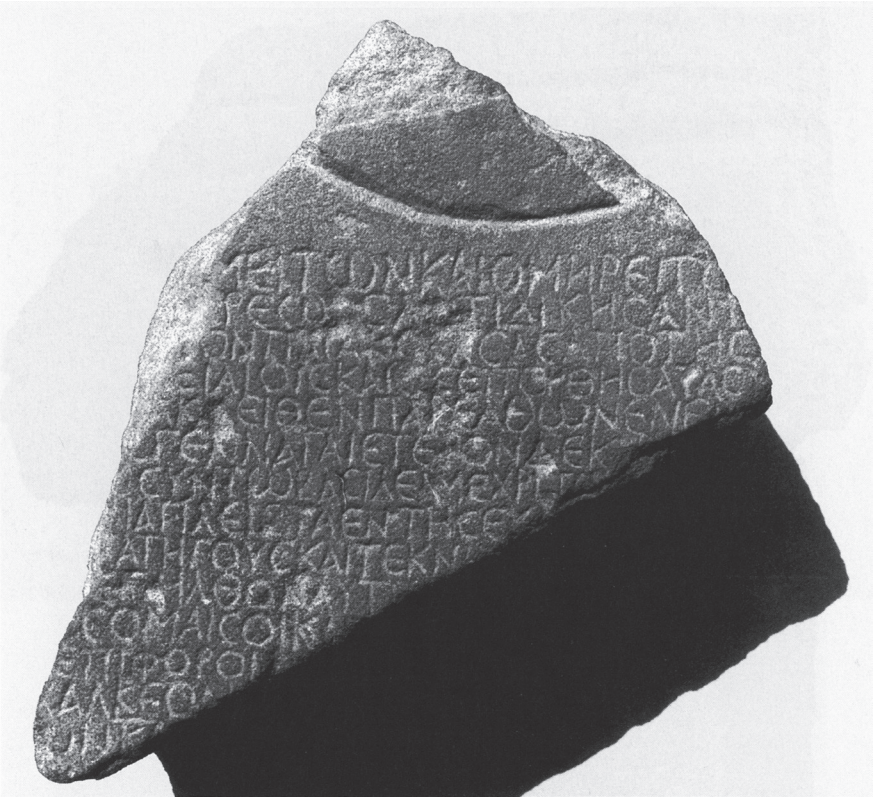

図 2　石碑 1、SNM 508（Łajtar 2003: Pl.lxxv）（Courtesy of Peeters Publishers）

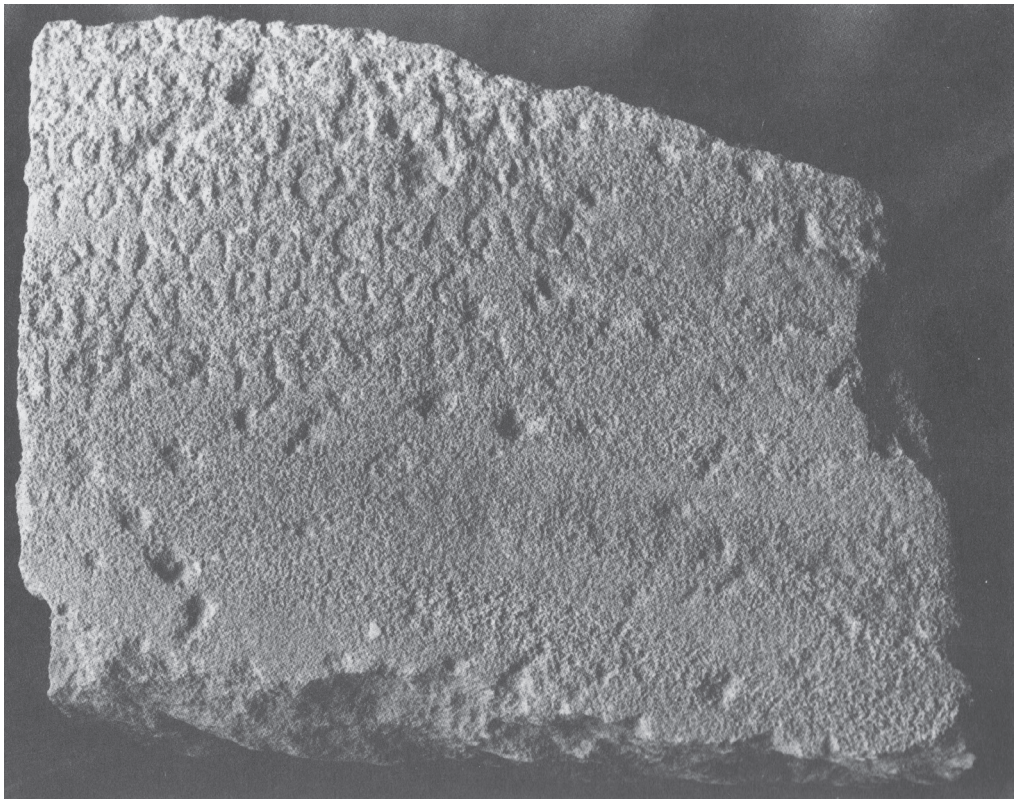

図 3　石碑 2、SNM 24841（Shinnie and Anderson 2004: Fig.73）（Courtesy of Harrassowitz Verlag）

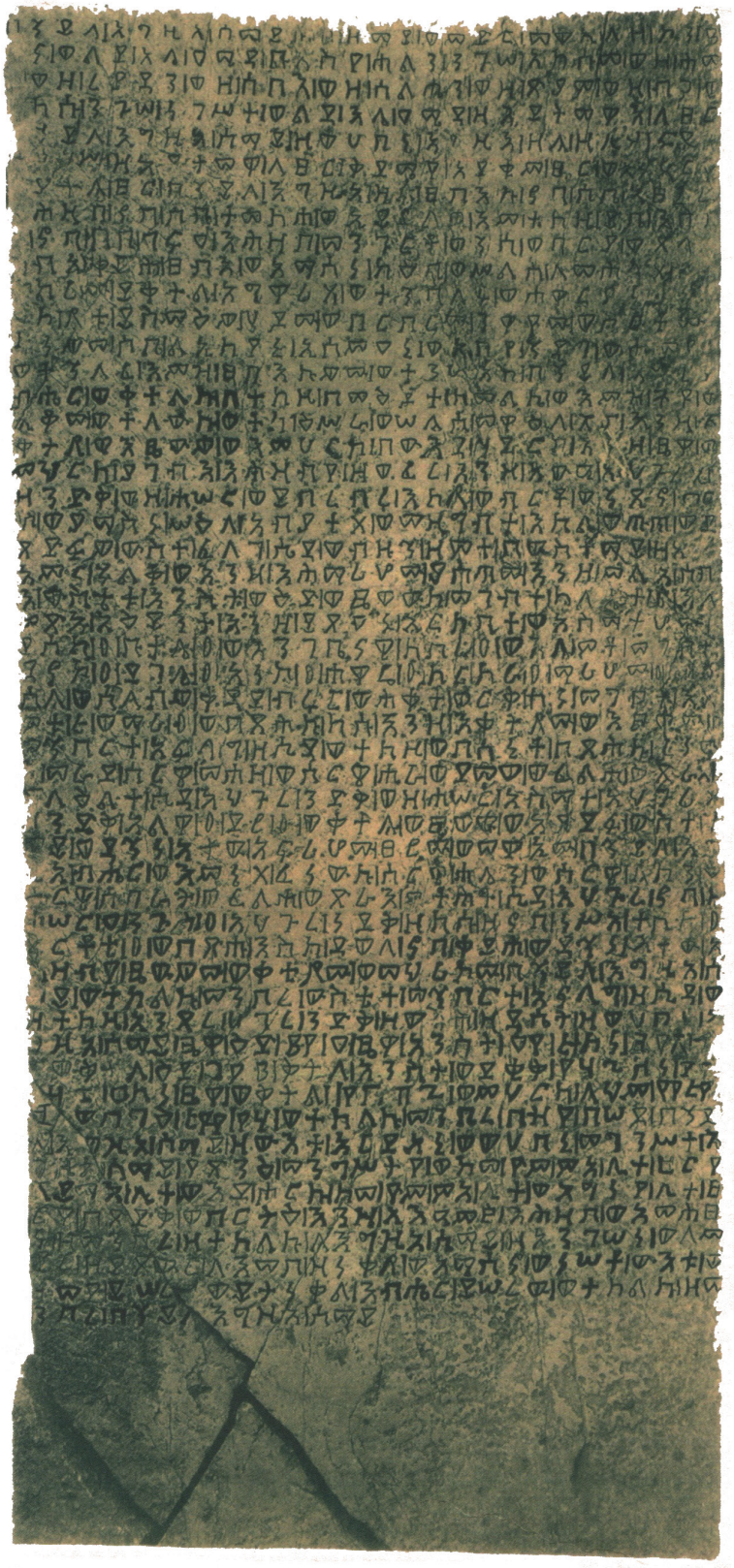

図 4.1　石碑 3、DAE 11（Littmann 1913: Tafel.v）（De Gruyter Sabäische, griechische und altabessinische Inschriften, Walter De Gruyter GmbH Berlin Boston, 1913. Copyright and all rights reserved. Material from this publication has been used with the permission of Walter De Gruyter GmbH.）

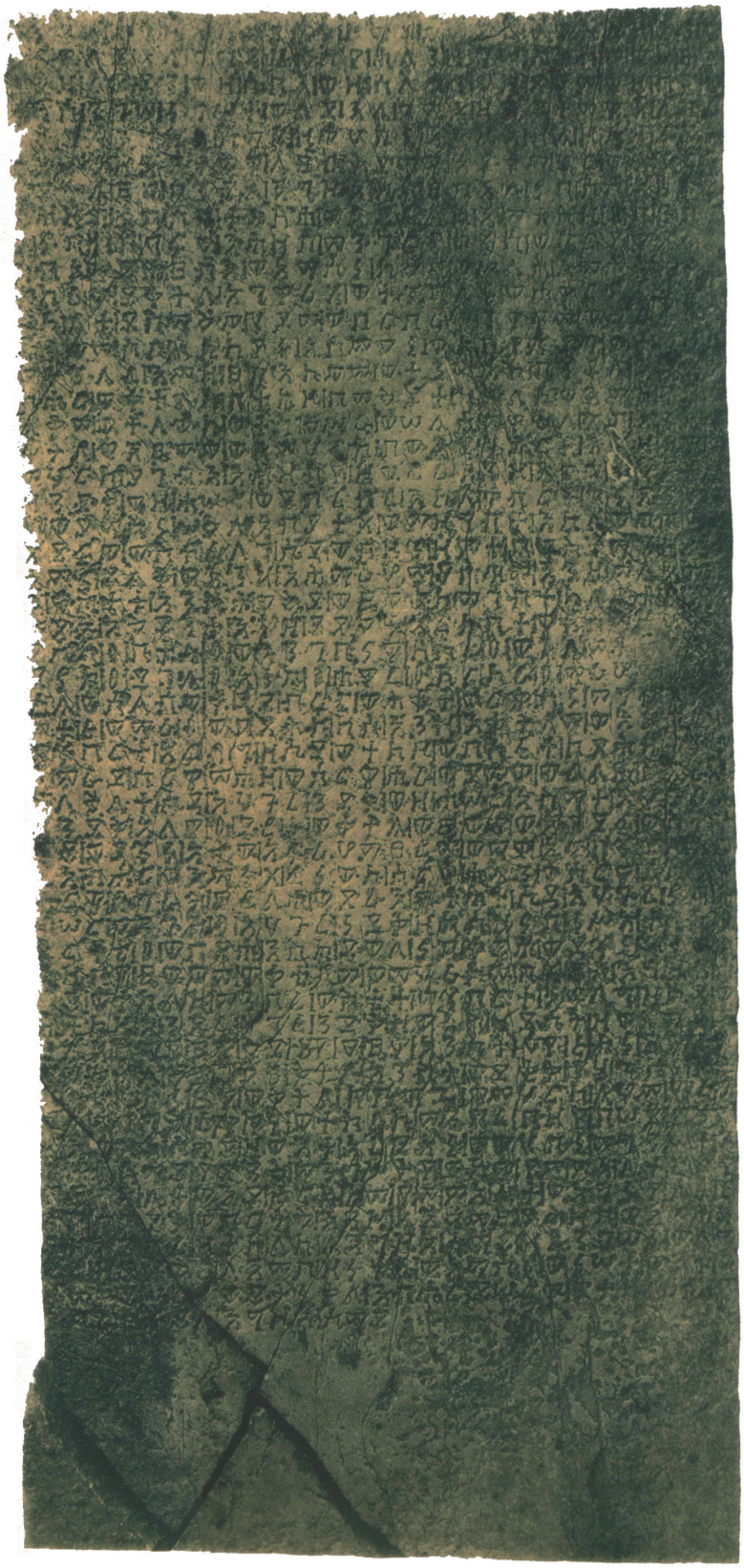

図 4.2　石碑 3、DAE 11（Littmann 1913: Tafel.v）（De Gruyter Sabäische, griechische und altabessinische Inschriften, Walter De Gruyter GmbH Berlin Boston, 1913. Copyright and all rights reserved. Material from this publication has been used with the permission of Walter De Gruyter GmbH.）

び出し、[20]隠されていた偶像、食糧、木綿を破棄し、[21]セダへ投げ捨てた。どれほど多くの人々が溺れ死んだかは[22]わからないが、彼らの船は、乗っていた老若男女[23]共々沈んでいった。私はまた、[24]ラクダにまたがり偵察にきていた2人の有力者を捕らえた。それぞれ、名を[25]イェサカ、ブタレといった。アンガベナウィという首長、[26]ダナコ、ダガレ、アナコ、ハワレという4人の有力者は殺害した。彼らに帯同していたカルカラという神官については、[27]負傷させたのち、銀の装身具と金の小物入れ（指輪？）を取り上げた。[28]計5人の有力者と1人の神官を殺害した。

私はその後、カスへ向かい、[29]セダとタッカゼの合流地点で彼らと戦い捕虜を取った。そして翌日、[30]マハザ、ハラ、ダマワ、ファルハ、セラの各部隊を、[31]セダ上流、煉瓦と藁でできた2つの町へ送り込んだ。[32]アルワ、ダロという町であった。各部隊は、虐殺を行い、捕虜を取り、人々を[33]川へ投げ捨てたのち帰還した。恐怖におののいた彼らは、[34]全土の主、その御力の前にひれ伏した。私は続いて、ハーレン、ラケン、[35]サバラト、ファルハ、セラの各部隊を、セダ下流、[36]煉瓦と藁でできたノバの4つの町（とネグス？）へ送り込んだ。このうちタビト、[37]フェルトティという町は、かつてカスが建てたものであった。全土の主、その御力により、各部隊は「赤ノバ」の勢力圏近くまで入り込み、[38]虐殺を行い、捕虜を取り、戦利品を奪ったのち帰還した。

③結論部

[39]私はその後、セダとタッカゼの合流地点に王座を設けた。[40]正確には浮島の上（？）、煉瓦の町と向かい合う地点である。[41]天主は、次のものを（戦利品として）私に与えてくれた。214人の男の捕虜、415人の女の捕虜、合わせて629人。[42]602人の男の死者、156人の女と子供の死者、合わせて[43]758人。捕虜と死者、合わせて1387人。[44]10560頭の牛、51050頭の羊。全土の主、その御力により、[45]私はここサドに王座を設ける。[46]その御力により、私は王となった。覇権は、天主により揺るぎないものとなった。全てのものがひれ伏したいま、[47]私は、大いなる勝利を手にしつつある。全てのものがひれ伏したいま、[48]私は、正当な王として民を加護する。[49]天主、その御加護のもと、私は大地を統べる。[50]私の統治を逃れ、否定し、拒絶しようとするものは、[51]その種族もろともこの大地から消えていなくなるだろう。私は、[52]天主の御力により、この王座を設ける。

3．史料の歴史的意義

（1）石碑1と石碑2

以上の試訳を念頭に置き、ここからは各石碑の歴史的意義を検討してゆく。石碑1は、上述したように欠損が酷いためその解釈は困難を極めるものの、マフレムという神が言及されていることは極めて重要である。というのも、アクスムの土着神であるマフレムは、エザナによるキリスト教の受容とともに姿を消すからだ。言葉を変えれば、石碑はこの受容前（後4世紀中葉よりも前）に製作されたことになる（Shinnie and Anderson 2004: 107; Hatke 2013: 75-76）。他方、石碑1がメロエで発見されたことも特筆されて然るべきだろう。なぜならこれはアクスムの王がメロエに石碑を建立していたことを、換言すれば、メロエがアクスムの干渉を受けていた可能性を示唆するからである。そして、この可能性に初めて深く切り込んだS.M. バーステイン（Burstein 1981; 1984）は、干渉の実態を次のように説明している。第一に、石碑1の内容を順に追いかけると、アクスムの王が「ここ」に辿り着くのは言い争いと略奪の後である。したがってもし「ここ」がメロエを指していたとしても、メロエが侵略されていたとは必ずしも言えない。第二に、その数行後に現れるもう一人の「王」は、これまでアクスムの王を指すものと考えられてきたが、一人称単数形で用いられていないためむしろ別人物と見なすべきだという。バーステインによればつまりこの石碑は、「ここ」に辿

り着いたアクスム王がメロエ王とともに何らかの行動を共にしていたことを物語っている。とあれば、問われるべきは行動の実態であろう。結論を先取りにすれば、バーステインはメロエとアクスムの間で何らかの主従関係が結ばれていたのではないかと主張している。彼の主張は決して推測の域を出るものではないが、メロエとアクスムの関係性に新たな光を投じたものとして高く評価され、今日でも頻繁に引用されている。ここでさらに附言しておくと、バーステインの主張を補強しうる新資料が近年提示されており、特筆に価する。それはメロエで見つかった一点のファイアンス製小像（図 5）で、この小像は一部欠損しておりかついかなる碑文も刻まれていないものの、スタイル的には明らかにアクスムの伝統に由来する。そして、その由来を特定すべく図像学的検討を試みた M.H. ザッハ（Zach 2006; 2011）が、この小像とアクスムの総督に図像的類似が認められるとして、上述の主従関係を裏付けようとしている。僅かな類似を主従関係に敷衍することには疑問の余地無しとはしないが、新資料から解釈を一歩推し進めていると評価することができよう。石碑 2 もまた欠損著しくその解釈は難しい。ただし、石碑 1 同様、マフレム神への言及を根拠とすれば石碑 2 は後 4 世紀中葉よりも前のものとすることができる。一方、議論を読んだのは「ここに王座を設け」という一節だ。というのも、王座はアクスムの戦勝記念碑に他ならないからである（Phillipson 1998: 52-53）。すなわちもし「ここ」がメロエを指しているとすれば、石碑 2 はメロエに対するアクスムの戦勝を記念していることになり、極めて重要である。ただし、石碑の欠損に鑑みて、これ以上の考察は根拠のない推測とならざるを得ない。

図 5　ファイアンス製小像、E.224（Zach 2011: Abb.1）（Courtesy of the Garstang Museum of Archaeology, University of Liverpool）

（2）石碑 3

石碑 1 と石碑 2 が数行しか留めていないならば、石碑 3 は全 52 行ものゲエズ文字を留めている。石碑 3 がエザナによって建立されたこと、彼が紀元後 4 世紀中葉にキリスト教を受容したアクスムの王であることを前述したが、改めて碑文導入部を眺めると、エザナが「カスの王」という称号を所持していることに気付く。カスとはすなわちクシュのことで、換言すればこの称号はエザナによるクシュの掌握を意味する。同様に重要なのは「天主」という表現である。というのもこのような一神教的表現（Uhlig 2001: 29, 31）は、チュルクや G. ハトケ（Hatke）が指摘するようにキリスト教受容後に特徴的なものだからだ（Török 1988: 36-37; Hatke 2013: 89-94）。二人の指摘が的を射ているとすれば、石碑 3 はしたがって紀元後 4 世紀中葉よりも後に年代付けることができる。

続く碑文展開部は、エザナが行なった軍事遠征の様子を物語っている。これによれば、軍事遠征はノバに対して行われたものであり、彼らの反抗的かつ不遜な言動がその理由として挙げられている。そして、一連の悪事に業を煮やしたエザナはケマルケの浅瀬でノバと開戦するやすぐさま勝利を収め、セダのほとりまで彼らを追い詰めている。ノバとはメロエ王国縁辺部を遊動していた部族の一派であり、他にもマングルト、ハサ、バリアといった部族や「黒い人々」、「赤い人々」と呼ばれる集団が遊動していたことがわかる。各部族は必ずしも考古学的特定対象となっていないが、以上の記述は、メロエ王国を取り巻く民族的多様性を如実に物語っており、重要である。

ただしより重要なのは次の一節である。ノバ討伐後、エザナはクシュに向かって軍事遠征を継続しているからだ。同じく碑文展開部によれば、エザナはクシュへ辿り着いたあとセダとタッカゼの合流地点で捕虜を取り、部隊複数をセダの上流と下流の町に送り込んでいる。上流の町はアルワとダロ、下流の町は「ノバの 4 つの町」であり、このうちタビト、フェルトティはかつてカスが建てたものであったという。そして、本稿が問わねばならないのはこれらの町の在り処である。なぜならもしここにメロエが含まれているとすれば、石碑 3 は、メロエがエザナの軍事遠征によって滅ぼされたことをまさに証明しうるからだ。この点、一つの地名対照表（表 1）が近年提示されているため、これを基に議論を掘り下げてゆこう。

表 1　石碑 3 に現れる地名とその現在地（Breyer 2013: 302 より作成）

石碑中の地名	現在地もしくは相対的位置
タッカゼ	タッカゼ川
ケマルケ	タッカゼ川の浅瀬
セダ	アトバラ川
アルワ	アトバラ川上流方面（クシュの町）
ダロ	アトバラ川上流方面（クシュの町）
ネグス	アトバラ川下流方面（ノバの町）
タビト	アトバラ川下流方面（ノバが奪ったクシュの町）
フェルトティ	アトバラ川下流方面（ノバが奪ったクシュの町）

碑文展開部に現れる最初の地名は「タッカゼ」である。まず、「お前らにタッカゼは超えられない」とノバが発言していることから、ここがノバとアクスムを分かつ重要地点であったことがわかる。また、「タッカゼにあるケマルケの浅瀬」という表現から、タッカゼが川であったこともわかる。さらには、ノバと開戦したエザナがこの川と「セダ」の合流地点でクシュと開戦していることから、この川がノバとクシュの領土を貫流していたこともわかる。この点、上述の地名対照表は「タッカゼ」を現在のタッカゼ川に、後に合流する「セダ」を現在のアトバラ川に求めているが、これはいささか無理があると言わざるを得ない。というのも、タッカゼ川とアトバラ川の合流地点はナイル川のはるか彼方（少なくとも 200km 以上東）に位置し

ているからだ。換言すれば、度々指摘されているように（Behrens 1986; Bechhaus-Gerst 1991）、本合流地点でエザナがクシュと開戦することは些か難しいと言わざるを得ない。換言すれば、むしろ「タッカゼ」はアトバラ川までを含めたタッカゼ川水系として理解すべきであろう（Török 1988: 35; Burstein 1998: 148 n. 43, 45; Hatke 2013: 116）。この場合、エザナはタッカゼ川上流でノバを討伐したのちアトバラ川へ入り、アトバラ川とナイル川の合流地点でクシュと開戦したことになる。ならば、本合流地点からナイル川を上流へさかのぼると辿り着く「アルワ」と「ダロ」はどこにあるのであろうか。果たして、これらの町はメロエを指しているのであろうか。

この疑問が象徴するように、議論の焦点は「アルワ」と「ダロ」の所在である。ただし「ダロ」については、この町を第 5 急湍周辺のダル（Darru）へ求める A. ディルマン（Dillmann 1879: 225）が通説を形成しており、いずれにせよこの町をメロエと結びつける向きは認められないためこれ以上は立ち入らない。他方、「アルワ」をめぐってはソバ（Soba）とメロエ（Meroe）が主要候補地として提唱されている。前者を支持する L.P. キルワン（Kirwan）や U. モヌレ・デ・ヴィラード（Monneret de Villard）は、「アルワ」はのちのアルワ王国（アロディア王国）の首都を指しているに違いなく、したがってその王宮跡が存在するソバへ求めるべきだと主張する（Kirwan 1937: 51; Monneret de Villard 1938: 38）。これに対し、後者を支持する A.H. サイス（Sayce 1911: 5）や F. ヒンツェ（Hintze 1959: 30-31）は、王宮跡がキリスト教時代に属するのみならずその周辺にメロエ王国時代の遺構や遺物が殆ど認められないことから、「アルワ」をメロエの王宮跡として理解しようとする。仮にこの理解が正しいとすれば、メロエはエザナの軍事遠征によって滅ぼされたという解釈が成り立ちうる。ただしいくら魅力的であるにせよ、この解釈が過度の推測の上に成り立っていることを忘れてはならない。要するに、エザナがクシュに対して軍事遠征を行ったことは確かだが、この軍事遠征によって滅ぼされた町がメロエであった —— したがってこれによりメロエ王国もまた歴史上から姿を消した —— と結論付けるには至らない。

具体性に富む碑文展開部とは対照的に、続く碑文結論部は明らかな誇張表現に染まっている。その代表例が「10560 頭の牛、51050 頭の羊」という表現で、古代社会においてこれはおよそ非現実的な数と考えて差し支えなかろう。ただし、数の大小はどうあれエザナはすでにクシュの討伐を済ませ、セダとタッカゼの合流地点に王座を設けている。この王座がもし実際に検出されれば、上述した町の同定への有力な手がかりとなろうが、現在のところはまだ見つかっていない。

（3）小結

ここまで、メロエの衰退を理解するために欠かせない史料群に基礎的考察を加えてきた。石碑 1 と石碑 2 については、マフレム神への言及を手掛かりとして紀元後 4 世紀中葉よりも前に年代付けられること、メロエとアクスムの間の主従関係に切り込むための重要史料となっていることを確認した。石碑 3 については、一神教的表現を手掛かりとして紀元後 4 世紀中葉よりも後に年代付けられること、エザナが行なった軍事遠征の様子を綴っていること、軍事遠征がノバとカス（クシュ）に向けたものであることを確認した。さらには、「アルワ」とメロエを同一視することで、メロエがエザナの軍事遠征によって滅びたという言説が生み出されていることも指摘した。ただし、繰り返しとなるが、この言説は依然多くの推測を孕んでいる。換言すれば、以上に見てきた史料群からメロエの最期を論じることにも自ずと限界がある。ここに至って、該期の理解を深めるためには新たな視点が求められていることが了解されよう。該期にどのような社会変化が生じていたのか、そしてなぜメロエ王国は歴史上から姿を消すことになったのか。本稿はその本格的解明を意図したものではないが、最後に、今後の研究が目指すべき一つの方向性を提示しておきたい。

4. 今後の研究の方向性：終わりに代えて

メロエの衰退をめぐる研究の現状についてはここまで論じてきた通りであるが、課題としては、メロエとアル＝オバージ（el-Hobagi）の王墓が近年注目される。以下、簡単に順に論点をまとめ、今後の研究の方向性を浮かび上がらせてみたい。

メロエの王墓は、冒頭で触れた王宮から東に4kmほどの場所に造営されている。一般にベグラウィヤ（Begrawiya）と呼ばれるこの場所は、1920年から1923年にかけてハーバード大学・ボストン美術館合同調査隊が発掘を行なったことで有名であり、発掘主任を務めたG.A. レイズナー（Reisner）が南墓域（Beg. S.）、北墓域（Beg.N.）、西墓域（Beg.W.）の三つを発見している。このうち、王及び女王が埋葬されたのは北墓域である。前3世紀初頭から後4世紀の半ばまで存続したとされるこの墓域には、約40人の王及び女王のピラミッドが造営されており、葬祭殿に施されたカルトゥーシュや埋葬室で出土した遺物を手掛かりとしてすでに多くの王名が判明している。一方、北墓域とほぼ同時期に利用された西墓域には、王及び女王以外の特権階級、すなわち王家に仕えた高官や大司祭などが埋葬されていたことが知られる。少なくともレイズナーがそのように結論付けてからというもの、北墓域と西墓域の階級差は自明のことと見なされてきたし(Reisner 1923: 20)、言葉を変えれば、西墓域は北墓域の被葬者の従属下に置かれていたとの認識が大半を占めてきた。

この認識自体はおおむね正しい。というのも、北墓域に王及び女王が埋葬されている以上、彼らがメロエ王国の最上位に君臨していたことを疑う余地は無いからだ。ところが、北墓域と西墓域の関係性は近年見直されつつあり、結果として、メロエの歴史的理解にも大きな変化が生じつつある。そして、この見直しを進めているのがC. リリー（Rilly 2006）である。上述した階級差の実態へ切り込むべく文献学的検討を試みた彼は、西墓域の出土史料が王家特有の定型文を有していることを突き止めており、ここから、西墓域にも北墓域に匹敵する人物が埋葬されていた可能性を提唱している。この人物を「在地系首長（local princes）」と名付けるリリーによればすなわち、北墓域と西墓域は二つの別々のクランを表象している可能性が高いという。これはあくまで試論に留まるものだが、リリーの見解は、メロエの衰退がこうした在地系首長の台頭と密接に連動している可能性を示唆しており極めて重要である。今後は、西墓域と言わず王国各地における在地勢力の析出作業が勢いを増してゆくことであろう。

そして、そのような在地勢力の拠点的遺跡として近年最も注目されているのがアル＝オバージである。メロエの約70km上流に位置するこの遺跡は、直径50mを超える巨大墳丘群から成る墓域であり、1986年から1990年にかけては発掘調査も行われている。そして、4年間にわたるこの発掘調査が学界に大きな衝撃を与えた。墳丘の一つで「王（qore）」と刻まれた青銅製容器が発見されたからだ（Lenoble 1999: 197, Fig.29）。すなわちこの発見を素直に受け取るならば、アル＝オバージにも未だ見ぬ王が埋葬されていたことになる。ならばそれは誰なのか。これこそが、該期における最大の論点の一つとなっている。その解明が一筋縄でいかないことは明らかだが、最後に改めて強調したいのは、該期の研究がアクスムとの関係性の理解から在地勢力の析出作業へその関心を移しつつあることだ。在地勢力とメロエ王家の関係性を探ること、したがって両者の間の緊張関係をあぶり出すことがおそらく次の課題となってゆくであろうが、その実践を目指した努力が日々続けられている。以上、論を尽くしきれなかった点は多々残るものの、これをもって研究の課題の素描と代えたい。

末筆となるが、本稿への図版掲載を快く承諾してくださったワルシャワ大学のアダム・ライター教授、ヴォジミエシュ・ゴドレウスキ教授、リバプール大学考古博物館学芸員のヴィクトリア・ドハーティ＝ボーン氏、ピーターズ出版社取締役のポール・ピーターズ氏、ハラソヴィッツ出版社アシスタントのアンドレア・ジョハリ氏、そしてヴァルター・デ・グリュイター出版社に感謝の意を表する。

参考文献

Bechhaus-Gerst, M.

1991 "Noba Puzzles: Miscellaneous Notes on the Ezana Inscriptions", in Mendel, D. and Claudi, U. (eds.), *Ägypten im afro-orientalischen Kontext: Aufsätze zur Archäologie, Geschichte und Sprache eines unbegrenzten Raumes. Gedenkschrift Peter Behrens, Afrikanistische Arbeitspapiere Sondernummer 1991*, Cologne, pp.17-25.

Behrens, P.

1986 "The 'Noba' of Nubia and the 'Noba' of the Ezana Inscription: A Matter of Confusion", *Afrikanistische Arbeitspapiere* 8, pp.117-126.

Bernard, É., Drewes, A.J. and Schneider, R.

1991-2000 *Recueil des inscriptions de l'Éthiopie des périodes pré-axoumite et axoumite*, Paris.

Breyer, F.

2013 "Die Nennung Meroës in den Inschriften 'Ēzānās von Aksum", in Feder, F. and Lohwasser, A. (eds.), *Ägypten und sein Umfeld in der Spätantike, Philippika* 61, Wiesbaden, pp.291-310.

Burstein, S.M.

1981 "Axum and the Fall of Meroe", *Journal of the American Research Center in Egypt* 18, pp.47-50.

1984 "The Axumite Inscription from Meroe and Late Meroitic Chronology", in Hintze, F. (ed.), *Meroitistische Forschungen 1980: Akten der 4. Internationalen Tagung für meroitistische Forschungen von 24. bis 29 November 1980 in Berlin, Meroitica* 7, Berlin, pp.220-221.

1998 *Ancient African Civilizations: Kush and Axum*, Princeton.

Dillmann, A.

1879 "Über die Anfänge des Axumitischen Reiches", *Abhandlungen der Königlichen Akademie der Wissenschaften zu Berlin 1978*, pp.177-238.

Eide, T., Hägg, T., Pierce, R.H. and Török, L.

1998 *Fontes Historiae Nubiorum: Textual Sources for the History of the Middle Nile Region Between the Eighth Century BC and the Sixth Century AD III. From the First to the Sixth Century AD*, Bergen.

Finneran, N.

2007 *The Archaeology of Ethiopia*, London.

Garstang, J.

1911 *Meroë: The City of the Ethiopians*, Oxford.

Hatke, G.

2013 *Aksum and Nubia: Warfare, Commerce, and Political Fictions in Ancient Northeast Africa*, New York.

Hintze, F.

1959 *Studien zur meroitischen Chronologie und zu den Opfertafeln aus den Pyramiden von Meroe, Abhandlungen der Deutschen Akademie der Wissenschaften zu Berlin, philosophisch-historische Klasse 1959.2,* Berlin.

Kirwan, L.P.

1937 "A Survey of Nubian Origins", *Sudan Notes & Records* 20, pp.47-62.

Łajtar, A.

2003 *Catalogue of the Greek Inscriptions in the Sudan National Museum at Khartoum (I. Khartoum Greek), Orientalia Lovaniensia Analecta* 122, Leuven-Paris-Dudley.

Lenoble, P.

1999 "The Division of the Meroitic Empire and the End of Pyramid Building in the 4th Century AD: An Introduction to Further Excavations of Imperial Mounds in the Sudan", in Welsby, D.A. (ed.), *Recent Research in Kushite History and Archaeology: Proceedings of the 8th International Conference for Meroitic Studies, British Museum Occasional Paper* 131, London, pp.157-197.

Littmann, E.

1913 *Sabäische, griechische und altabessinische Inschriften, Deutsche Axum-Expedition* 4, Berlin.

Monneret de Villard, U.

1938 *Storia della Nubia Cristiana, Orientalia Christiana Analecta* 118, Rome.

Phillipson, D.W.

1998 *Ancient Ethiopia: Aksum, Its Antecedents and Successors*, London.

Reisner, G.A.

1923 “The Pyramids of Meroe and the Candaces of Ethiopia”, *Museum of Fine Arts Bulletin* 21, pp.11-27.

Rilly, C.

2006 “Paleographical Evidence for Local Princes in Begrawwiya West”, in Caneva, I. and Roccati, A. (eds.), *Acta Nubica: Proceedings of the X International Conference of Nubian Studies Rome 9-14 September 2002*, Rome, pp.435-442.

Sayce, A.H.

1911 “Introductory: The Ethiopian Capital”, in J. Garstang, *Meroë: The City of the Ethiopians*, Oxford, pp.iii-iv.

Shinnie, P.L. and Anderson, J.R.

2004 *The Capital of Kush 2: Meroë Excavations 1973-1984, Meroitica* 20, Wiesbaden.

Shinnie, P.L. and Bradley, R.J.

1980 *The Capital of Kush 1: Meroe Excavations 1965-1972, Meroitica* 4, Berlin.

Török, L.

1988 *Late Antique Nubia: History and Archaeology of the Southern Neighbour of Egypt in the 4th-6th c. A.D., Antaeus: Communicationes ex Instituto Archaeologico Academiae Scientiarum Hungaricae* 16, Budapest.

1997 *Meroe City: An Ancient African Capital, EES Occasional Publications* 12, London.

Uhlig, S.

2001 “Eine trilinguale cEzana-Inschrift”, *Aethiopica: International Journal of Ethiopian and Eritrean Studies* 4, pp.7-31.

Zach, M.H.

2006 “Die Statuette Liverpool E.224 aus Meroe”, in Czerny, E., Hein, I., Hunger, H., Melman, D. and Schwab, A. (eds.), *Timelines: Studies in Honour of Manfred Bietak III, Orientalia Lovaniensia Analecta* 149, Leuven-Paris-Dudley, pp.159-165.

2011 “Aksum und das Ende Meroes”, in Raunig, W. and Asfa-Wossen Asserate, P. (eds.), *Der Mensch und sein Lebensraum am Horn von Afrika, Orbis Æthiopicus* 11, Dettelbach, pp.7-31.

1977 *Shabtis*, 3 vols, Leiden.

エジプト学研究　第 24 号
2018 年 3 月 31 日発行

発行所 / 日本エジプト学会
〒 169-8050 東京都新宿区戸塚町 1-104
早稲田大学エジプト学研究所内
発行人 / 吉村作治

The Journal of Egyptian Studies No.24
Published date: 31 March 2018

Published by The Japan Society of Egyptologist
1-104, Totsuka-chyo, Shinjyuku-ku, Tokyo, 169-8050, Japan
© The Japan Society of Egyptologist